

4-2			
主題	参観型家族会が家族の負担感と肯定的認識に及ぼす効果に関する 質問紙及び聞き取り調査		
副題	～家族と利用者・スタッフの関係を再構築する～		
キーワード 1	家族会	キーワード 2	在宅介護
		研究(実践)期間	4ヶ月
法人名	株式会社ケアワーク弥生		
事業所名	小規模多機能型居宅介護拠点 ユアハウス弥生		
発表者(職種)	森近恵梨子(介護福祉士)		
共同研究(実践)者	岩瀬良子(介護福祉士)		
電話	03-5840-8652	FAX	03-5840-8653
今回発表の 事業所や サービスの 紹介	弊社は東京大学が目の前にある文京区弥生町にて、訪問介護・居宅介護支援を中心とした事業を営んでいる。小規模多機能型居宅介護拠点「ユアハウス弥生」は平成 18 年に開設し、「本人の選択に基づいて、自分らしく生きるために、広い心とあたたかい行動、根拠を持って応援し続ける」ことを理念に掲げている。		
《1. 研究(実践)前の状況と課題》 自宅での生活を支援するにあたり、家族との信頼・協力関係の構築は不可欠なものである。そのため、当事業所では 2010 年から 1 年に約 3 回、家族と事業所スタッフ、あるいは家族同士の交流を目的として、家族会を開催してきた。その内容は「事業所が目指しているケア・理念の共有」「介護保険制度改正に伴う説明会」「認知症に関する勉強会・グループディスカッション」「利用者を交えての飲み会」などである。しかしながら、近年、参加する世帯が固定化していた。また、以前と比較して、家族が積極的に介護に関わる場面が少なくなってきたのではないかという印象を持つスタッフもいた。そこで、家族会の企画内容を根本的に見直すこととした。		《2. 研究(実践)の目的ならびに仮説》 先行研究によると、家族会を継続する際の困難として①家族に時間がない②運営資金がかかる③必要性を感じてもらえない、といった課題が指摘されている(注 1)。また「疾患に特化した知識提供や介護技術の指導、カウンセリングがより効果的(注 2)」、つまり個別的介入が効果的との研究報告もある。これらを踏まえ、『ユアハウス参観』(以下『参観型家族会』)を企画し、2015 年 3 月、実施した。この取り組みによって、家族会への参加率の向上と、家族の介護技術の向上が期待できるものと予測した。さらに分析に際しては、家族介護者について従来より検討されてきた「否定的認識(介護負担感の軽減)」に加え、今後重要視されるべきと梶原ら(注 3)が指摘する「肯定的認識」に着目することとした。	

《3. 具体的な取り組みの内容》

参観型家族会の企画内容は、以下の通りである。①1 週間の期間を設定し、その中で家族の都合の良い日・時間を選択してもらった②開催場所は事業所内とした③開催目的は「家族に事業所での本人の姿を見て頂き、今後の家庭内のケアに良い影響を与えられるようにする」ことに焦点を当てた④当日出勤しているスタッフの中から各家族と関わりを持つ担当を事前に決定し、より詳細な企画を練った⑤当日は、各利用者の良さを引き出すと同時に、家族がその場に馴染めるよう、担当スタッフを中心に個別的に介入を行った⑥開催後、参加した家族 11 世帯に対してアンケート（n=10）を実施した。質問紙は、家族会の満足度など 4 項目から成り、各所に自由記述欄を設けた⑦質問紙にて不十分な箇所を明らかにするため、J-ZBI（注 4）を参照し質問内容の方向性を決定したうえで、半構造化インタビュー（n=8）を実施した。面接時間は 30 分程度とし、ICレコーダーにて録音、後日書き起こし、書き起こした文書を J-ZBI に基づく負担感と肯定的認識に着眼して分析を行った。

《4. 取り組みの結果》

- 1) 参加率は 40.7%で、データの取れた過去の家族会 8 回のうち、3 番目に高かった。
- 2) 「トイレケアが問題だったので、ちょっとできるようになったことが楽になった」等、介助の際の負担感が軽減していた。
- 3) 「様子を見てきて、ほっとしましたね。もう大丈夫だ、預けとけばって」「家にいるよりも穏やかですね」「あんな笑みは家では見られなかった」と事業所に対する肯定的認識、「自分で椅子から立ち上がっていたでしょ。あれは家では見られないよね」等、本人に対する肯定的認識が増幅していた。不安を見出した家族もいたが、全体の満足度は高かった。
- 4) その他、「スタッフと交流できた」といった意見が多数見られた。

《5. 考察、まとめ》

参観型家族会は、事業所内での本人の様子を透明化することで、家族の介助に対する負担感を軽減させると共に、事業所や本人への肯定感を高めることがわかった。加えて、スタッフとの距離感が縮まる等、多面的な効果を得られる。開催側の負担が少ないのも長所であり、当事業所では今後も年に一回の開催を計画している。

《6. 倫理的配慮に関する事項》

本実践発表を行うにあたり、ご家族に口頭および文書にて①研究の趣旨②研究参加は自由であり、協力同意撤回が可能であること、それによって不利益を被ることがないこと④プライバシーに配慮しデータは匿名化すること⑤得られた情報は研究目的以外に使用しないことを説明し、同意書への署名をもって研究協力への承諾を得た。

《7. 参考文献》

- 注 1) 宮本久子他（2015）「認知症高齢者の家族介護者の負担に関する文献検討」インターナショナル Nursing Care Research 第 14 巻第 1 号、注 2) 牧迫飛雄馬（2009）「家族介護者に対する在宅での個別教育介入が介護負担感および心理状態へ及ぼす効果」老年社会科学第 31 巻第 1 号 p12-19、注 3) 梶原弘平他（2012）「認知症高齢者の在宅介護者が抱く介護の肯定的な認識と特性に関する研究」認知症ケア学会誌第 11 巻第 2 号 p487-495、注 4) 荒井由美（2011）「Zarit 介護負担尺度日本語版（J-ZBI）」日本臨床 69 巻増刊号 8p459-463

《8. 提案と発信》

参観型家族会は、家族に事業所内の生活の様子を見て頂くことで、本人の新たな一面の発見に繋がり、家族がどのように本人への介護に関わっていけばよいのか考える機会を生み出す。介護負担の軽減に加え、事業所への不信感の軽減・スタッフとの信頼関係の構築にも効果が認められ、家族の介護に対する漠然とした不安の払拭や、より良い支援提供のための体制構築にも寄与するものである。他事業所でも、家族の役割を再認識する契機として、参観型家族会が開催されることを望む。